

「生きているイメージ〔Living Images〕」論の批判的検討

—— H.Belting (2001) / W.J.T.Mitchell (2005) を中心に

福本 直起 (國學院大學)

本発表では、ハンス・ベルティンクや W.J.T.ミッチェルらを中心に展開されてきた「生きているイメージ〔Living Images〕」を、主にデジタル・テクノロジーが関わる事例から検討することで、彼らの議論における限界と可能性——特に、イメージを知覚する人間身体的位置づけに関わる——を明らかにする。

情報通信技術の発展に起因し、精巧なものから粗悪なものまで、膨大な量のイメージの流通にさらされる今日、私たちとイメージとの繋がりはますます複雑化している。そのような、イメージとの錯綜した関係を考察するために、ひとつの糸口となるのが「生きているイメージ」である。20世紀末から興ったイメージ論の流行の只中に位置づけられるこの議論は、ほぼ同時期に上梓されたベルティンクとミッチェルの著書に代表される。

ベルティンクは、『イメージ人類学』*Bild-Anthropologie: Entwürfe für eine Bildwissenschaft*(2001)において、イメージが物質的現前を果たす際に帯びる社会的機能に注目し、「イメージ - メディア - 身体」の基本図式を提示する。そこでイメージは、人間身体を含めたメディアを次々と渡り歩く活動的なものとして理解される。そのようなノマド的な活動性を備えたイメージは、人間身体へと移り住むことで、人間の生(そして死)と相補的な関係を取り結ぶ。彼はここに、人間身体と不可分ながらも、私たちの意のままにならないイメージの生命力を主張している。

一方、ミッチェルは *What Do Pictures Want?: The Lives and Loves of Images* (2005) において、私たち観者がイメージに向ける態度に、懐疑と妄信とが両立していることを指摘する。そこで主張されるのが「生物としてのイメージ〔image-as-organism〕」である。彼は、非物質的な心象と物質的な画像を区別しつつ、その区分を生物学における「種」と「標本」の関係に重ね合わせることで、イメージが広まりながら人間と共進的に生きている状況を提示する。

分析方法に決定的な違いがありながらも、イメージ概念の脱西洋中心化やイメージの機能分析に主眼を置きつつ、イメージそれ自体がもつ生命力を主張する点に、両者の共通性が見出せる。しかし、両議論が突き合わせられ、その長短を含めた「生きているイメージ」論の包括的な評価がなされた研究は殆どない。

以上を踏まえ、本発表では、次のような手順で検討を行う。はじめに、ベルティンクとミッチェルの議論を共通点/相違点に留意しつつ概観する。次に、デジタル・テクノロジーを用いる具体事例と照らし合わせることで、彼らの「生きているイメージ」論が抱える問題点を浮き彫りにし、イメージ - メディア - 身体の間で複雑化する相互関係への援用可能性を含めた同論の現在地を明確にする。